

第3部 写真集

1980 年代



1990 年代



2000 年代



2010 年以降





理工学部 3 号館（旧都市工学科南棟，旧土木工学科棟）2010 年度に改修



理工学部 4 号館（旧都市工学科北棟，旧建設工学科棟）2020 年度に改修
左：改修前，右改修後

4号館改修計画：ラーニング・ループの教育環境を目指して

理工学部4号館改修ワーキンググループ

都市工学部門 三島伸雄・中大窪千晶・平瀬有人・宮原真美子

環境施設部施設課 緒方太・猿渡康弘・上野裕康・山田孝明ほか

長らく土木工学科・建設工学科・都市工学科の校舎として使われてきた4号館（鉄筋コンクリート造4階建・2,280㎡）は築35年を経て老朽化が著しく、2020年度に改修工事が行われた。都市工学部門の建築系教員が設計監修に関与することで単なる改修ではない機能強化により、ラーニング・ループの教育環境のための空間創出を目指した。既存の枠組みを超えて学習するプロセスをつくり出すラーニング・ループの実現のために、以下の5つの設計コンセプトに改修計画を行い、2021年3月に竣工した。

01／校舎自体が「地域の縁側」（=社会との接点）となることを目指す

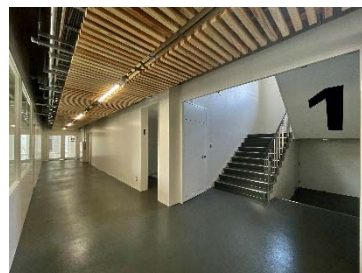
02／教育型授業から学び型授業（アクティブ・ラーニング）まで対応する〈Learning 1.0（従来型の授業）・Learning 2.0（アトリエ・工房・実験室）・Learning 3.0（パフォーマンス・プレゼンテーション）〉

03／多様なアクティブスポットが集合し、様々な体験の場をもつ部局共用全学交流スペース〈デザインギャラリー〉を1Fに配し、地域へ拓く

04／校舎の教材化（構造や設備のエLEMENTを意図的に露出）による教育研究拠点となる

05／都市工学部門建築系教員による実験的な改修計画により話題性を創出し、大学のブランディングに寄与する

特に4号館には主に建築系の研究室が入居することから、製図室やデザインスタジオなどはスケルトン天井とし、既存躯体（柱・スラブ・梁）の劣化補修部分や空調・電気設備配管などを可視化することで、建築を学ぶ学生の生きた教材として活用している。外観についてもタイル浮きのある劣化部分をあえて素材の異なるタイルで補修することで、オーセンティックな改修を可視化している。



編集後記

本記念誌の編集担当に指名されたのが、2019 年 12 月でした。その時はまだコロナ禍の影響下になく、記念事業なども行う予定でした。しかしながら、2 月、3 月と時が進むにつれ、とても記念事業を開催できる状況ではなくなっていました。そのような中、何とか記念誌だけでも発行したいという教職員一同の強い思いから、OB・OG、退職教員の多大なご協力もあり何とか記念誌の発行にたどり着くことができました。私自身は土木工学科最後の年の卒業生であり、編集担当をさせていただいたことを大変光栄に思います。また、編集を通して改めて土木工学科及び建設工学科の歴史や都市工学科への発展、理工学部 1 学科 1 2 コース制への更なる発展の経緯をおさらいしつつ、その経緯の中で皆様がどのような思いで本学科の中で過ごされ、そして卒業・退職後も本学科のことを思っていて下さるのかをご寄稿いただいた原稿を読みながらひしひしと感ずることができました。最後になりますが、記念誌の完成にご尽力いただいた全ての方々に感謝申し上げ、編集後記といたします。

(記念誌編集担当 猪八重拓郎)